

資料：10

大分県のニホンザルの生息分布および生息地の環境変化と被害

長岡寿和（大分短大）

大分県の野生ニホンザルの生息分布域と生息地の環境変化を年代ごとに調査している。大分県では現在、本匠村や耶馬溪町など8市町村にその生息が示されている。1923年の長谷部言人による調査を含め、全国的なニホンザルの生息地調査のまとめは岩野泰三〔にほんざる4, 1974〕によってなされている。1923年の長谷部によれば下毛郡（耶馬溪地域）には4ヶ所報告がある。その3ヶ所が現在の山移川付近の鹿熊岳と鴨良で現在の耶馬溪町内にある。

今回のアンケート調査は耶馬溪町で70才以上の男性を対象に行ったものである。郵送によるアンケートで180人から回収され、無回答が40人であった。回答者の中で野生ニホンザルを見たことのない人が41人いた。見た人の99人のうち92人は年代が書かれていたが、7人は見た時期は書かれていなかった。

初めてニホンザルを見た人の最も古い記録は1910年代である。80才代の人が10才の頃に見たものである。初めてニホンザルを見た年は1910年代に3人、1920年代8人、1930年代4人、1940年代8人、1950年代16人、1960年代13人、1970年代14人、1980年代以降91年までが23人となっている。

初めて見た場所は1960年代までは林道や山奥という表現がかなりあるが、1970年代から1980年代は人里・民家周辺という人が全体の約9割にもなる。60才から70才の年齢による活動範囲を考えたとしても、近年はニホンザルが人里近くで見られるようになってきている。

作物の被害は年代ごとに野菜やカキなどいろいろあるがシイタケはどの年代も必ず記録されている。作物の被害が出始めた年代は1950年代からが多い。被害地域も、昔からの生息地と考えられる鹿熊岳周辺の山国川・金吉川・山移川などの川沿いの地域で報告されているものが多い。

今後は森林組合や狩猟関係者など、人里離れた山の奥で、ニホンザルに会う機会の多い人からの聞き取り調査を行い、アンケート調査の内容と比較検討したい。

資料：11

霊長類の脊髄・神経根および神経線維における微細血管構築

—アクリル樹脂注入法による—

太田義邦・岡田成賛（大阪歯大・解剖）

脊髄・神経根の血管構築に関してはAdamkiewicz (1882)とKadyi(1889)の2人が画期的な発見をして以来、脊髄の血行に関しては多くの研究が発表されてきた。しかし、中枢神経系である脊髄と末梢神経系である脊髄神経との間を連絡する神経根の血管構築について観察したものはない。本研究では、微細血管鋳型標本を作成し（Ohtaら、1990）、走査電顕下で脊髄—神経根—脊髄神経線維の経路を連続して立体的に観察した。

1. 脊髄

脊髄内動脈血は2系統に大別され、その1つは前脊髄動脈より分岐して脊髄中心部を栄養する中心動脈と、もう1つは前・後の脊髄動脈よりなる軟膜動脈叢および後脊髄動脈からの多数の穿通枝よりなっていた。これら動脈枝より毛細血管が派出され、灰白質では毛細血管は密な網目を形成し、白質では放射状に走行しながら疎な網目を形成していた。また脊髄前角の毛細血管網の網目は後角のそれよりも大きく（疎く）なっていた。

2. 神経根および後根神経節

分節血管(segmental vessel)から脊椎枝(spinal branch)が出ており、これより脊椎前枝と後枝および神経根枝が派出されていた。神経根枝から神経根栄養動脈と神経節栄養動脈が分岐して、神経根と後根神経節に分布していた。神経根には長軸方向にラセン走行する10~15本の毛細血管が分布していた。また、この毛細血管は脊髄灰白質に分布する毛細血管と連続していた。

後根神経節では神経節の表層に動脈網と静脈網の形成が認められ、それより神経節内に向けて毛細血管が派出し、節内では規則的な毛細血管網が分布していた。表層の静脈網は分節静脈に直接流入していた。

3. 脊髄神経線維

神経周膜の外側では毛細血管網の形態を示し、神経周膜の内側では毛細血管はラセンを描きながら神経長軸方向主体に走行し、疎い網目を形成していた。

以上、脊髄と末梢神経との中間的位置に存在する